

ことばの定位を求めて (一)

——「個人と個人との間に存在するものは
全く単に空虚なる空間ばかりではない……」——

山 口 信 治

序——ただそれはことばだけですか？——

- 一、生活、ひととことば
- 二、「こと」と「は」
- 三、ことばの研究から
- 四、表現と理解
- 五、認識、それは誤まるものなり
- 六、コミュニケーションの流れをスムーズにするもの阻害するもの
- 七、もう一つの阻害

序——ただそれはことばだけ

ですか？——

「人間は……である」といった類いの人間に関する規定や格言は決して少なくない。いわんや人をして「語る存在」(岡田雅勝)といひ「問いかける存在、問いかけられる存在」(E・W・ストラウス)といひ、

「人はただ言語によつてのみ人間である」(K・W・フンボルト)さらにはまた「ことばを操る動物である」(室伏武)などなど、これらすべて人間の「おしやべり」(Zotol「発言」⁽¹⁾)について規定したものといつていい。実に大いに興味あるところだし、人の人たる由縁をこの「おしやべり」し合う存在につまり(向いあつて話すところの人たち)に求めたところなど感服するところだ。」

日頃、何気なく口にすることはだがよくよく考えてみると、これほど、人間の存在同様不可思議なものはない。なかなしく不思議なものばかりか不気味なものともさえ感ずるのは筆者だけではあるまい。例えば、これ程分っているようで意外と掘りさげてみると曖昧なものであつたりする、それでいて

人間の口からはきだされることばがときには人を生かしたりして、気を良くしたかとおもうと、逆に人を殺さぬまでも生きる望みさえうばひ取り、人を落胆させてしまふに足るものとなる。それでいてなお「ことばは人なり」や「ことばが人をつくる」といつたことばのもつ積極的な一面も否定できない。よしんば、ことばがただ伝達の道具(インストラメント)ではなく、確かに人の見たり、感じとつたりした事柄、つまり事実や思想それに感情といったもの(マインド・ファクト)を相手方に伝えようとする場合、これすべてをことばという記号を介して伝達することになるが、機械と異つて人の場合には人の関係があひまつて事実のすべて、感情のすべてをこれによつて伝えるところにそもそもその忠実度を落し、このため誤まりをつくる落し穴が存在する。それでもなおこうしたことばのもつ不完全さ、いや限界をもちながらも、どの時代どの民族に共通にみられる言語こそちがえ、ことばを媒体としてつちかつてきた文化にある共通性をもち、ほぼ同一にすることなどあるなどまことに不思議なことと言わね

ばなるまい、つまりことばの営みを人類個々の根元的なそれとして特筆すべき現象であらう。それにしてもことばは心のうごきを表現したもので、なによりもことばは他の書きことば（文章）とは異って、K・W・フンボルトが指摘したような「生きたことば」即ち、「エネルギー」であって絶えず、瞬間々々通りすぎてゆくものであること、さらには分節された音声による精神のうごきと解するならば、W・ゼイムズのいう「ことばは流れる……」という指摘にわれわれを魅惑の世界にひきずり込んでゆくのもあながちオーバなことではあるまい、そうした魅惑にとりつかれながら、あれこれ思いみる昨今だが、得てしてアキレスのたとえのように際限がない、つまりこれに近づけば近づくほど底知れぬ魅惑の世界の虜となってしまうのだし、未解決な部分はこれを人間の本质つまり不可思議なものとして封印してしまうのである。

ことのほか、ことばの問題がとり上げられる時代、ともあれわれわれといえどもこれを避けこれに無関心ではいられない、人々はことばに異和感をいだき、ことばにう

たがいをもち、ことばに絶望する人々も決して少なくないことを認めないわけにはゆかないそんな時代にわれわれは生存している。なる程、ことばの「異和、懷疑、絶望」といった一連の語のもつ意味の共通項は……ことばの存在に対する否定である。」と指摘した河上正秀の洞察をわれわれとくに「ことば」を専門性とする者たちにとつてはかみしめて味わねばならないものがあろう。これこそことばが問題にされる時代の底にひそんでいる「ことばへの否定」を訴える人間の少なからずいることの証しだし、ことばに病む人間といった多少ドグマだがこの存在をも否定することはできない。いわんや筆者がおそれるのは人間にとつて「ことば」は大事なる前世代の遺産と言えるが、永い間、こうして人間とことばは人をつくり、ものをつくり、文化や精神をつくるのに大いに貢献してきたし、もっとも身近かに存在していたものが今、人の手を離れ人に疎遠なものとしてのうごきすら呈しつつあることだ、そればかりか人間を圧倒し、敵対するものとして人間の前に立ちほだかろうとしている。まさにこれこ

そ「ことばへの否定」と言い古されたものだが人間疎外としてこれを受けとることができのではなからうか。

日常われわれがふりかえるとき、こんなことを耳にしたり見たりすることが少なくないであらう、「ことばでなしにこころで話しができたらね……え」「ことば（議論）なんって無意味よ、もはや行動あるのみよ……」とか「じれったいわね、フィリンド（感覚）でいこう」などと若人たちは言う、これなどまさに、自分の思想に対する表現方法のいたらなさを嘆いて、いやまた直接ことばによる表現をさけての間接表現、つまり「意味の横すべり現象」⁽³⁾と解するが。改めて問題にすべきこと柄ではあるまいか。

差し当り、我々社会福祉家、とくにロゴセラピストらにとつて、この「ことばとは何か」いわんや「ことばとは何かについて知ること」に急務を要する課題があらうかと思う。

そこで先のことばの障害を一応ふまえながらこの小論ではつとめて「語る存在」としての人間に焦点を合わせながら、ささや

かではあるが社会福祉の原理ともいえる理解に供したいというのが筆者のネガイである。

ところで、これまでこうしたことばが、われわれ福祉プロバににとってあまり話題として取り上げられたり、討論されたりしたことがないばかりか、いわんや社会福祉(学)研究として真正面から取り組んだものというのもそう多くはないに違いない、もし仮りに筆者の推察がまをいっているとするならば、ことのほか「おしゃべり」(talk)……当のこと柄をあらわならしめること)と唯一、絶対とするケースワークをはじめグループ・ワーク C. orig アドミニストレーションそれにソーシャル・アクションといった社会福祉(学)の方法論はおろかその定位を根こそぎ失なうことになり兼ねない。差しせまった今日この事実、つまり「ことばの否定」の問題とどう受けとめどう解決策を講ずるのであろうか?、いわんや、「語る存在」としての人間に栄光と帰ることができるのであろうか……と、わたしなりに自らを問い直してみたいと考えたからである。

今日のような高度にことばが発達した時代の社会、これをわれわれは、マスコミ・ソサイエティと名付けているのだが、ことばが豊かな反面その足元からことばがその形を崩れかけているのに人々は不安をもちはじめたといっている、茲に「ことばの乱れ」とか「ことばの危機」「断絶」さらには「ことばの貧困」といったさまざまな表現が用いられているが、要はことばのききんをこれらは物語っているものとおもう。いろいろその原因について考えるのであるが、中でも入谷敏男はその著書「ことばの生態」の中で都市化に伴なうはげしい人々の移動のためだとして、以下こう説明している。これまで個人の支えてきた行動空間の秩序が極度に乱れ、人々は不快、不安、焦燥がつのり、これがための結果だ。さらには「接触する必要のない人々も意志のないままつき合わされるところにまた不快や不安といった意志の障害や衝突がおこる」ためだとした。

若干、私見もまじえてもう少し説明するならば、米国の著名な文化人類学者 E・T

・ホールの紹介した「プロクセミックス」なる学問だが、彼は人間の感覚経験のひらがりを球形の空間を想定した。それに親密帯、個人帯、社交帯、社会帯、無縁帯の五つの空間を規定して他と自己との間に一定の秩序ある物理的空間もしくは心理的空間を述べた。ところが無縁帯にある関係すら、ラッシュアワの如き時間帯には自分と全く縁もゆかりもない赤の他人と車のなかではもつとも身近かに居合せねばならないというのだ。あるいはまた親密帯に在るべき人々が遠くへ離れたり、社交帯と個人帯との人々がいれかわったりして心理的恒常(平静さ)を失ない、彼らに不快を与えることすらあるのだという。さらに、これとことばづかいを関わり合せて、近くに在る人を親密帯に在るんだと早合点して、つい乱暴な失礼ないい方をしてしまうこと、またその逆に親密帯の人でも遠くに離れてしまうと、つい他人であるかのようにバカでいねいなことばを使ってしまうことがあるというのだ。こうした事情が生起するのは都市化された環境の変貌の著しさだとして日常の「ことばの乱れ」がおこるのだと説明し

ているところが実に面白い。

では一体、次に経験するようなことは何であらうか。

しばしばわれわれ臨床家がクリニクで直接耳にすることばだが、クライアントがわれわれワーカーに面と向って「それは唯あなたのことばだけですか」と無表情に問いかえされることがある。確かに何時間も彼の訴えに耳を傾け、とき折適宜にことばを介して助言したことが、彼をして「ただのことばの往復にしか過ぎなかった……云々」と言わしめているのである。まさに、「個人と個人との間に存在するものは、全く単に空虚なる空間ばかりではない……」と堅く信じていた筆者らにとっては大変なショックとして、以来心を離れないのである。

本来、われわれ社会福祉(学)はその理論的概念を社会学に負っているが、こと「ことば」に関するものも同様であって、さしずめ、米国の社会心理学者 C・ホーランド (C. Hovland (1912~))、C H・クーリー (C. H. Cooley (1864~1929)) やそれにボガダス (E. S. Bogardus (1882~)) に負

うところ大である。彼らは人間活動の七〇%はこのコミユニケーションに費されることに注目した、ホーランドの如きはマス、コミの効果研究を通してヒーマン・コミユニケーションを「刺激を伝達するもの」と規定したのにはじまり、クーリーは、第一次的集団理論をうち立てるなかで「人間関係を成立し、これを発達させる機構」^{トランスアクション機構}だとしてこれを進めた。

まさに、社会福祉(学)とくに人との接触を媒体として、ある援助を効果的にサビスするロゴセラピストらにとつては、このことばの効果を度外視しては成り立たないことは自明の理だ。ましてや、その結果が「ただことばだけですか」と言わしめるような悲哀を二度と味わいたくもないし、また繰り返してはいけくないのだ。

そこで、この機会にあらためて、ことばのもつ役割やその限界などについて基礎的な学習をしておくこともまんざら時代遅れとは言えまい、ましてや反福祉的でもなからうと考える次第である。

(1) ギリシャ語の「ロゴス」には「発言」(言う、話す)と「存在」の二義

がある。

(2) 藤井孝夫「ことば」より

「極言すれば、言語なくして人間なし、人は言語において人間であり、人間となる……まさに言語を語ることに於いてパースンとなる。正しく人間の名に価するものとなるのである。」四十一頁。

(3) 入谷敏男、ことばと人間関係、講談社現代新書、十二頁。

一、生活、ひとことば

「おしゃべり」がただ人へのみ特異なものではないことは動物の研究から少しづつ明らかになってきた。とくに霊長類のそれは人類に似て、広汎な音声を用いてコミユニケーションをしていること、その他、表情とか姿勢それに動作などに、実にその特徴がみられるという報告がある。とするならば人に限った現象でないことば活動というものが如何にして発生するのか、まことに興味あるところだ。まずそれを考えられるならば第一に彼らが優れて集団の生活を営んでいること、これがコミユニケーションを必要とするものと考えられる。即ち、集団生活を営む上での社会の構成員相互の

間に一定の結合や結合の関係がなり立つ必要

条件が存在することである。さらにはまたそこには相互に接触する必要上、ある様

式即ちことばが不可欠の条件として存在することなど共通の基盤をもっていることな

どを指摘できよう。ところが人間と他の動物のそれと根本的に異なるところはK・デ

イビスやその他の学者らが指摘するとおり

「シンボルコミュニケーション」⁽¹⁾⁽²⁾の違いであらう。つまり動物のことば(社会体系)

は主として遺伝という決定因子による本能的メカニズムのなせるわざであつて、むしろ本能的無意識的に他のメンバーに伝えるのであるがその刺激も固定化した様式で反応するといった遺伝的傾向をもつ Bio-social System に対して、人のそれは、むしろ Socio-cultural System と解され相互

の接触のための様式が後天的に学習された行動様式であり、これを通じての反応ということになる。なおその際人間の場合は、arbitrary symbol (任意シンボル) を媒介する Symbolic communication をもち

て、その根元的な特徴とする存在 (Davis, K. Human Society, 1950, p. 31-) である

ことを指摘しこれを説明している。

いずれにしても、われわれ人間にとつてことばはあらゆる人間生活の中核なる、営みと解していいし、またこれによらないものは何一つないといつて過言ではないほど豊かな人間の個性味はもとより、文化なる国民精神を生み、これを養ない強いては国家といった社会性をも成立するものであつて、これが一翼を担っていることになるわけ、改めて「言語こそ世界と人生とをとく鍵であり、決してものでは解くこととはできない」と評した藤井孝夫の洞察もさることながら、このことばの存在の意義とはたらきに着自せざるを得ないものといつていい。なお、あえて引用するまでもないことだが、有名なエピソードにJ・ピアゼが幼児らの思考について問われた際、彼のこたえは「彼らがどこで考えるか」について「幼児らの返答は口(声)で考える」といったと伝え及んでいるがまさに口が思考の根元であるといつた指摘はわれわれに多くの示唆を与えるものだし、また興味のあるところだ。他方、これは生理的な運動が同時に伴なうというものであつて、これを無視

するわけにはゆくまい。

そこで川原佐公の「話しことば」を参考に少しく説明するならば、まず話し手(送り手)が何を話すのかは、伝えるべく適当なことばをえらび、これを一定の規則に則つた配列にととのえ、その指令が脳から発信されると刺激が運動神経に伝わり舌や唇それに声帯の筋肉などの音声器官が働いてことばが発せられる。こうした一連の運動、具体的に頭に浮んだニーズ、これをスキナーはマンド (mand) とファクト (fact) とに二分して、前者をわれわれ人間の直接的なニーズ(生物的需求)に対して他人に何かを求めることば活動、後者は、前者の生理的需求に対して社会的欲求、例えば同意とか承認、感謝、満足などの社会や自己に対する事実の報告、など他人のために自己の環境に対する説明を与えることば活動としたのだが、自己表現としてのことば活動は、主に音声、つまり音声器官のいとなみとして、それに伴なう筋肉の活動を伴ない完全なスピーチには不可欠な要因とそれに身ぶりをふくむところの、つまり聴覚的把握とそれに視覚的把握、ときには身体的

接触をも加えた人間のもつ感覚全般を通じて活動といえる。したがってまた、話しことばは以上のべたような生理的、心理的過程であり、このための重要な通路が聴覚を通じての認知である故に對話は音響学的な現れ (acoustic manifestation) を特徴とすることを佐宏平が指摘している。まさに、送り手の意図なり目的というのは、物理的な現象としての「音」 (speech sound) つまり空気の振動として発声され、これを伝える。さらにこの音声は受け手のきき手に耳を介して「音」として受信 (impression) まさしく生理的過程、さらに受け手に伝わった音声は「意味」としてシンボルとしての理解する、心理的な機能がおこる。つまり、音声として認識・知覚して、これを話しことばとして把握する、いわんや、音の形態 (Gestalt) が意味の理解に重要な役割を果たしうることを知ることができよう。

こうして人類は幾世紀にわたってことばを駆使し、これをなかだちとして人間の思想や感情を伝達し合い、相手との意志の疎通を通じて歴史や文化をつくり上げてきた

諸事実を無視することはできない。しかればことばに関する経験から得られたことば法則とも言うべきもの、つまり、人間のことば、意識、行動、さらには意見の変化など、その幾つかを列挙するならば、(一) からだ全体ますことばであること、(二) 話し手、聞き手との協力作用により相互理解が可能となること、(三) この對話を通じて人間関係が成立つこと、(四) なお人間関係を成立させることばの働きには、(イ) 人間の感ずる事柄や思想感情を外 (他) に向って表現する。またその際共通の記号を用いる、(ロ) 第二のはたらきは相互にある共通の意味を分かち合うという作用を生む、(ハ) 話し手から発せられることばは現在自分がいだいている意識の状態「関心、欲求、価値感……」になんらかの影響を及ぼすが、さしずめ相手方の発言がそれに適合するかあるいは不適合なものであるかによって、相手に対する対処の仕方が決定され、親疎のかわり合いが生じてくる。(同音異語、同じ音声語でも意味のことなることば「雨」「鉛」「孝行」「航行」などなどが存在すること、さらには同じことばでも受けとり方により

内容を異にするもの、例えば「こ精がでますね」といった日常の単なる挨拶語でも、話し手の相手に対するほめことばともとれば、ときには相手に対する皮肉、あるいは輕蔑のそれとして受けとられることもある。(内) 相手との同意、調和、協調、それにその運を通じて相手を許容し、それを理解することにより「我」「汝」としての実存的對話へと自覚すること、(外) さらに、この関わりを通じて自己の意見の変更や、(イ) 自己と他人との人間関係を知る手がかりを示唆するもの……としてのことばの作用を拾い上げることができよう……。

以上述べたように、ことばが多方面にわたり影響し合っている事実をあげ、いかにことばと人間生活が深く関わりをもっているかを知る上でも唯一の手がかりであることを述べておくことにとどめる。では一体「ことば」とは何か、これについて次ぎに述べることにする。

(1) Davis, Kingsley, Human Society, 1950, p. 31.

(2) 南 博、現代のマスコミュニケーション、昭和26、六・七頁、「ここで一般に動物の間には「シンボリック・コミ

ユテケーション」が行われていないといつても敢て不当ではないであらう……。

(8) 「人間だけが言語において、言語を通して考え、交通し、自己を表現し、対自、對他、対世界存在として自己を把握する」(藤井孝夫「ことは」、三八頁)

(4) C・H・クレーラー「コミュニケーションなくしては人間は真の人間性を発展させない」C・H・Cooley, The Significance of Communication 1950, p. 145.

(5) イヴァー「文化とは集団から集団へそして世代から世代へと共にされ、伝達されるところの行動の反復型であり、行動の結果である」

(6) デイヴィス「文化は発生学的遺伝よりも伝達相互作用即ちシンボルによる伝達によって受けつけられる様式の思想や行動を包含する」

(7) Dewey, John, J. Democracy and Education, 1916, pp. 5, 6. 「社会は交通とコミュニケーションによって存続するのみならず、むしろ交通とコミュニケーションの中にこそ社会は存在するものというべきである」

二、「こと」と「は」

そこで、次いでことば活動のなり立ちに

ついで少し説明をつけ加えておくことにする。まずその一は「ことば」の成立にみられる解釈だが、「広辞苑」によると「こと」と「は」⁽¹⁾とに分けている。しかも前者は伝達の内容を現わすところの事物の指示すなはち、「事」なり「事柄」をあらわしたものであり、総じて事物に対する概念、指示物をあらわしている。また後者の「は」(葉)は記号、能記としての伝達される素材、つまり記号の様式をいあらわしたものだとしている。ここに改めて伝達の内容と素材の二つを分けているところなどまことに興味のあるところである。

いずれにしても、ことばが記号体系として一応の理解ができたのであるが、第二はこの人から人へ伝え合い(おしやべり)をする場合、とくにそのメディアとして、一つは直接相手方にシンボルを音声にのせて表現したり(話す)、あるいはまたシンボルを書いたりさらには身ぶりといった表現作用を用いて相手方に事実や思想を伝えることになるであらうし、さらにはまた相手方は送り手から伝えられたシンボルを聞いたし、読んだり、さらには視覚にて見たたりし

て、それを理解する作用つまり理解作用の二つがあつて、これらの二つの作用により相互にある意味が伝達されることである。

したがつてまた、事実やそれに関する知識、思想、感情といったもろもろの精神活動を相手に伝えようとする送り手(表現主体)と、伝えられるそれらを理解すべき理解主体、つまり受け手(聞き手)との相互作用により意志の疎通が成立することになる、がその際、送り手の精神に生起した伝達内容(ことがら)は記号体系によつて一たんに「記号化」される。この記号化されたものを「メッセージ」として実際には音声を紹介して表現される。他方受け手である理解主体は送り手の送つてきた「メッセージ」を彼と同一の記号体系により「記号の解説」をし、その「意味を理解」することになる。なおこの際、双方の主体間には有機的な相互作用がフィードバックされることになるが、これこそ対話(ことば活動)ということになり、図式化も可能であらう。(図1、十一頁参照)

いずれにしても、ことば活動とはと問わ

れば、われわれは「表現」と「理解」に至るプロセスであると言い得るであろうし、また送り手から受け手への記号の伝達過程、即ち記号が刺戟として受け手になんらかの反応を喚起させ、強いては彼の行動を変化させるものなど、学者の数ほどあげることができるが、ホーブランドのものを挙げて参考にしたいとおもう。

「一つの個体が他の個体の行動を変更する刺戟を伝達するプロセスである……」⁽²⁾が要は序に述べたフンボルトのいう「エネルギー」そのものであるといっても少しも過言ではない。

そこで以上ごく一般にことばと生活、つまりことば活動をみてきたのであるが、なお若干補足するならば、つまりことばを原理的にみるならば、凡そ次の二つに要約できるかとおもう。即ち一つは「知識の表現」と他は「理解による創造」ということになる。これはすでは室伏武の研究からの指摘であるが、ことばを社会福祉という唯一絶体なる方法と考えこれを位置づけるならば、まさしく彼の指摘した二つのことば活動は改めて、ことばによる援助過程は

必ずや直接、もしくは間接にか「自己の拡大」へと認識を深め、さらには広めて自己を含めた他我のそれにも一層の洞察を深めて生物個有の認知力動の体系化を保証するものであろう。ここに改めて人類はもとより人類社会が永遠に存続すべき作業をこれを手がかりとしてはじめねばならないと考える。

はじめに指摘した如く、マス・メディアによるコミュニケーションといえども、パーソナル・コミュニケーション抜きにしては存在しえないのだし、改めて「ことばの乱れ」や「ことばの危機」の時代のなかで、このパーソナル・コミュニケーションの存在と役割を十分に理解しておく必要があるかとおもう。

そこで実は「ことばとは何か」に答えねばならないが、周知のように「ことば」の研究というものはいわゆる最大の関心である言語の起源をはじめ意味や機能³について各方面から研究されるに至った。それは生物学、心理学、社会学、論理学、それに哲学等に、そこで次ぎにこれらの研究の成果から若干整理して人間と言語との関係を取り

上げておきたい。

(1) 野口恒樹「ハイデッガーの言語論から我汝哲学へ」皇学館大学紀要十五、昭五十二年三月、三七四頁。

「日本語の「こと」という言葉には色々の意味があるが……一つは言葉の意味する「こと」(言)であり、二つは事実を意味する「こと」(事)である。わが国語の「こと」もまた、言葉と事実を(或存在)との一致を暗示しているところ」⁴がききよう。

(2) Howland, G. I. Communication of Persuasion, 1953, p. 12.

「Social Communication」, in Reading in Public Opinion and Communication, p. 182.

三、ことばの研究から

そこで多少ともコトバに関する原理的なものを整理して概観しておこうとおもうが、この作業を始める前にどうしてもやっておかねばならないものが一つある。それはことば使いの問題、つまり用語の整理にあろうかとおもう。例えば「ことば」を、「一般に「言葉」としたり、わざわざ「コトバ」と片仮各や平かなになおしてみたり、さらには「言語」とか「コミュニケーション

ン」「意志疎通」などと表現する。また「語り手」「話者」「送り手」「聴者」「きき手」「受き手」などなど、どうやら言語学のなかでもこのことば使いについては未だ未整理のままにあるようにもとれる。そこで整理そのものがこの小論のねらいではないので、ただ努めて統一したことば使いをすることだけをおことわりしておきたい。

端的に言つて、ことばの研究を要約するならば「表現と理解」とにあるといつてもいいし、またこれにつきるのであるが、さらにことば研究の守備範囲と言うかそれから始めておくことにする。概して裾野の広さを物語るほど各方面への研究領域がみられるのだが

(I) コミュニケーション成立の諸条件に関する研究

(i) これに関するものではコミュニケーション成立のための物理的・社会的空間これを扱ったもので、その一つは、一定の秩序ある空間の存在、しかもその二つは相互にコミュニケーション可能な物理的距離にあること、これに関してもっとも興味ある参考

書は、入谷敏男「ことばの生態—情報時代のコミュニケーション」(NHKブックス78、昭和43、日本放送出版協会刊)をあげることができる。その十三頁以降随所に紹介されたE・T・ホール(文化人類学者)の人間を取り囲む四つの空間

「親密帯」 もっとも自分に一番近い空間で、自分と他人とが腕をのばしたら彼の身体に触れる範囲内で、しかも彼によるとこの空間ではお互いに求愛したり、慰めたり、また保護し合ったりする二人の距離として

それをとりかこむ
「個人帯」 通常個人的な会話のできる範囲内、腕をのばした先から一・二メートルまでの空間

それをとりかこむ

「社交帯」 体の中心から三メートルまでを占める空間、種々の会合、つきあいその外縁を取り囲む空間

「社会帯」 三メートル以上の空間で、いれば当人はとっては直接交渉をもたない空間

を挙げ、とくにあるアメリカの事務室での

事例をあげてこれを説明している。

「アメリカの場合、たとえばオフィスにきた客が受付嬢の三メートル以内に腰を下ろせば、彼女はその客に声をかけなければならぬと感ずるのが普通であるという。しかし、もし三・五メートル以上離れていれば、彼女はお客に構わずタ イプをつづけてもよいことになるという。」

まさにこの三メートル以内の空間こそコミュニケーションがなりたつための物理的条件といつてもいい。

(ii) 一応ヒーマン、コミュニケーションが成立する諸条件の一つに空間という環境の必要をあげたが、次ぎにそれらの条件の範囲内に位置する一組もしくは数組の人間の存在も欠くことのできない条件の一つである。しかも、これらのかわり合いはつねに相互的であることを要件していることを挙げねばなるまい。したがってまた、これらの要件を充たさぬコミュニケーションというものは成り立たず得ないと考えていい。

(i) ところで先にみた一組もしくは数組

の人間のダイオドであるが、ここにはそれを成立させるための人的環境としての諸条件、これを次ぎにみると、その一つはこの空間中に位置する人間の役割から、あるメッセージを伝える側のものとそれを受ける側のものとを必要とし、充分かつ忠実に伝える側の者の意図するところを、それを受ける側のものに聞きとられねばならない、そのための伝える側の者から受けとる側の者への意志疎通のために、その間にフィードバックがくりかえされることにより、より一層確実な伝える側の意図を察しようとする。このことばの往復、つまり対話を必要とするのであるが、さしずめここでの条件は、あるメッセージを伝える側のもの、受ける側のものを「話者」「話し手」「語り手」「伝え手」などなどあるが一応「送り手」、さらには受ける側のものを「聴者」をはじめ「きき手」「受け手」などなど存するが、これも「受け手」に各々を統一しておくことにする。したがってまた、コミュニケーションの有効性に影響するものはコミュニケーションの、知覚する人もしくは集団としてのこの空間を占

める二者の関係は相互に「送り手」「受け手」あるいはまた交互にその役割を演ずる一組もしくは数組のダイオドと考えることができる。

(二) しかもこのダイオドにはその心理的な側面をのぞいてみるならば、お互いの中に何らかの特性、つまり向い合いと呼ぶ社会的、心理的条件を必要としていることが分かる。しかも向い合いの結果そこには何らかの人的、社会的、あるいは心理的なちからの存在を見逃がすわけにはゆかない、つまりお互いは相互に引き合う力の存在と、この場の空間にはなにかんずくある種の緊張がうまれることである。いわんや、こうしたちからと緊張とが存在する空間と状況をコミュニケーション成立のための「場」と呼ぶが、いわゆるお互いに話のできる(行われる)場という条件がこれである。最近、行動科学なる学問が盛んになりつつあるが、その代表者K・レヴィンなどの説明によると、行動理解の公式ともいうべき「行動は個人とその環境との函数である」(Be=Ind・Env)にもとずいた、行動としてのことばをとり上げて、さらに

このことばの交流が行われるべき場をどくに力説しようとしている。つまり環境には物理的なそれと人的それとに二分し、前者をさらにこの場への第三者の参加により表現方法の変化を指摘し、後者は「受け手」の数が単数と複数の場合とでは相違とさらには「受け手」の人格的要素にふれた、彼の興味や性格、知能、経験それに社会的地位などによるコミュニケーションのながれをそれらにかけて説明しようとした点が大変興味ある場の問題ということになる。

(四) また同時にこの場は自己と他者との自発的な交流を意味しており、したがってまた、この場に生まれる、意志の異なる自己を相手方の場のなかへとけ込ませること、あるいはまた逆に相手方をも自分の場のなかへと相互にとけ込み合う場ともいうことができよう。要はまさにこうした空間、距離、状況、場などの成立条件にうらうちされた環境のなかで人間相互がことばを介してお互いに表現と理解をするところの行動の力動と断定することができよう。さらにはこうした必要条件、つまり成りたち条件をふまえながら「送り手」と「受

け手」の関係、ヒーマレ・コミュニケーションの体系、さらにはコミュニケーションの流れとそれを疎止する条件として「送り手」「受け手」の態度の問題、忠実なる態度、つまり *Hi・Fi* と「自我水準」等々の問題にもふれておくことが必要であろう。

まず「送り手」と「受け手」との関係だが、興味ある指摘はミードのそれであるが今若干これを紹介し説明をつけ加えてみることにする。彼女はこの双方の関係を三つの関わりに分けている点で、いわゆる

- 1) 協力的 Co-operative
- 2) 競争的 Competitive
- 3) 対生的 Cynbiotic

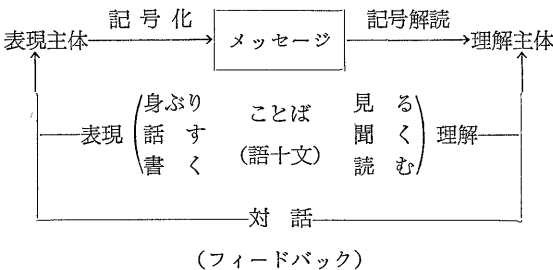
つまり彼女の説明によると、この第一、二、三の関わりを別に「一本の丸太を二人で運ぶ場合のようなもの……」「一本の骨を二匹の犬が争い合う場合のようなもの……」さらには「(一)(二)の場合でもなく、それでいて同一のことをする場合、(つまり二匹の動物がいて、しかも彼らが食うに足る丈の料のあることを確かめつつ、ともにこれと食するような場合)」以上の説明のように話しことばには、送り手と受け手と

が相属的に参加することによって成立するのだが、ある事実や内容や思想、それに感情などを受け手(特定の相手)に伝えたいという二人が同一の場に存在し、これによって両者の関係や夫々の状態によって、ことばが制約され、もって種々の表現の模式や理解が成立すると解せよう。したがってまた事実上話し合いが進展するためには、両者がともにそこに生活して、何らかの共通の基盤を背景に存在していることといった関わりが「送り手」「受け手」の関係を規定していることになる。次いで社会体系としてのコミュニケーションを考えるならば、なおことばを記号体系と解し、このことばは人と人との伝い合いの媒介をなすものであって、それには当然「話す」以外に「書く」ことや「身ぶり」などによる表現作用と、さらには「聞く」「読む」「見る」ことによる理解作用との二つの作用によって「意味」が伝えられる。しかもその際、表現作用に伴う表現主体(送り手)は、伝達すべき事実をはじめ思想や感情といった内容を記号体系を使って「記号化」し、さらに「メッセージ」としてこれを表現す

る。一方相手方つまり受け手(理解主体)は送られてきた「メッセージ」を同一の記号体系の「解読」によってその意味を「理解」という流れを想定することができる。こうして双方の主体、つまり表現主体と理解のそれとの間に「対話」がなり立って、伝え合いがなされることになる。室伏武の対話を中心とする。

図1

ことばのコミュニケーション



次いでコミュニケーションの流れは送り手と受け手の間になりたつ相互の關係によつて決定するのだが、さしずめメッセージの送り手の態度がきわめて重要な位置を占めることは容易に想像がつくであろう。古い諺のなかにもその幾つかを拾ひあげることが出来るが「ことばは身の父」「ことばは心の使い」「ことばは立居を表わす」等々、即ち人間のことばによる活動というのは言語のみが独立して存在するのではなくて、それに附随する身ぶりに代表されるような身体的運動をも合わせ、はなしことば（表現作用）の重要な一翼を担っている。

したがつてまた言語理解のための補助的な役割を演んじており「人の動作はことばより雄弁に物語る」ことを暗に示していることが分る。

尚、意識的な表現とは別に、送り手の無意識の態度もこれまたことばの効果を左右する要因となるが、例えばポケットに煙草を挿す動作、時計をみる動作、会話の際近くにあるメモに走りがきする無意味なしぐさ、あるいはまた、拒否のことばの代わりは無言で席を立つ等々、送り手の直接には

伝わることなくとも、彼の心理的な状態を物語るには十分な表現といつていいであろう。

要は人のことばは活動には当然ことばそのものの伝達に伴なう使命があるが、彼のことばをようく理解するためには、その人物がいかなる身体の表現を同時にするかをみて、何を語ろうとするのかを送り手の言葉とその人物の全体的な行動から推して理解するものであつて、極単にはこれなくしては、つまり口先でのことばの往復では会話の眞の表現と理解には至らないといふことでこの方面での研究も盛んに行なわれるようになってきている。

最後に対話における自我水準についてふれておこう。要はこの水準のもち方いかんにより話す場合も、聴く場合も影響をうけるもので、前者の場合には聴き手が自分よりもはるかに優れた字歴のもち主であつたり社会的地位において優れたりする場合には、できる丈けことばをひかえ目であつたり表現がどうもかたく遠まわしになり勝ちで、一般に意志の表出が困難になること、また、後者では、自分より優位な立場にあ

る者との対話において、しばしばみられることは無批判に信じたり、無条件に受け入れたりすることがある。また反対に本人よりも劣者にある場合ではむしろ批判的で、しかも自由な気持ちでできくことができるという態度の変化とみる事ができる。はやい話しが、われわれが初対面の人との会話の場合、凡そ意図的だともおもふが、容易には核心には触れず通過儀礼としての最小の挨拶や形式で済まそうとしたり、ときには天候のことあるいは健康のことなどを話題にしなから、話しの相手がいかなる人物でどんな身分の者かを探り求めようとする。除々に相手が何者であるか、いわんや自分より優るか劣るかを判断しようとする、つまり自我水準のもち方を指向する態度がみられるのもまことにおもしいかぎりである。

この他、内語 (inner speech) とか独話 (monologue) 、話しことばの分類に関するもの、言語発達と障害に関する研究とその治療法、たとえば、1) speech reading 2) die Kunst des Ablesens 3) oral method (S. Heinicke 1787) Lipreading

(Schwartz 1841) に「外言化、ことばの比較研究、音声、語、文章構成、音声言語、視覚言語、触覚言語、とくにろうあ者の言語教育、それに伝達、認識、思考、調整、創造といった、もちろん界限のないほど、その裾野の広がりをもっていて、しかも広い分野（言語学はもとより、哲学、宗教学、教育学、心理学、人間工学、社会学）からことばの研究がなされていること、したがってこの機会にわが福祉の領域からも大いに発言し、他との協力をおしめぬようにしたいものである。

(1) 藤井孝夫「ことば」神学研究、第十四号、関西学院大学、神学研究會、昭和四十年十二月刊、三十二頁。

四、表現と理解

一般にわれわれが「話しことば」（現象）を扱う場合、その対象は外言化にあることは先にのべたところだが、その接近法にはさらに、(一)他人に伝達する手段と、(二)自身の行動の結果の確認なり調整、計画のための独り語とがある。したがって今回はつとめて、後者のモノローブについては次の

機会に譲るとして、もっぱら他方への伝達についての記述するにとどめる。

したがって若干、その表現、理解に関するプロセスからそれらを述べてみたい。話しことばを介した人間相互の表現と理解に迫るための欠くことのできない人的条件は「話し手」と「きき手」の同一空間（物理的・心理的空間）の存在にあらうかとおもう。こうした対話関係は、これには親と子の会話にはじまる家庭生活上のそれ、仲間同志の雑談、教師と生徒との間の指導上の会話、事務上の要談、御用きき、外交員との接渉、医師との治療診断上の会話、その他身の上ばなし（面接）説得、勧告……などなど筆舌に限りがある程種々雑多な人間のコミュニケーション形式を挙げることができる。いずれにしても二者（話し手、聴き手）もしくは集団内のものとの関係と、ときには思わぬ同一空間を占めぬ第三者の侵人的なり立つもので、スピーチ・コミュニケーションなる場の設定が欠くことのできない条件となっている。

まず思想伝達の過程とも言えるコミュニケーション・モデルを考へるならば、普通五

つの「W」⁽¹⁾とか言われているが

1. Who (誰が)
2. Which channel (どんな回路によつて)

3. to Whom (誰に対して)

4. with What effect (どんな効果をとるのか)

5. says What (何について語るか)

のプロセス、つまり記号生産（エンコーディング・プロセス）としての表現作用（話す、書く、身振り）と、その理解作用（聞く、読む、見る）とからなるダイナミックな相互作用で、ともに機械工学の情報モデル⁽²⁾とは異った、つまりいわゆる心をもつ人間と瞬間瞬間が動的で、「エネルギー」を特徴としてもつことばはその増幅も一般静的モデルとは大いに趣を異にしている。がしかしヒューマン・コミュニケーションの場合もほぼ、これらのモデルに共通する回路と解するため、一応便宜上このモデルを使って、ことばの流れ、つまりプロセスを表現と理解との各要素とからみておくことにする。

これをラスウェルにしたがつて言うなら

ば、まず情報の伝え手（コミニケーター）あるいは担い手だが、これは「誰が」ということになる。この表現主体はコミニケーションの作用をおこなすもの、あるいは導く要素と考えられ、とくに要素の分析研究を

control analysis（統制分析）と呼んでいる。次いで第二の要素は、何（回路）によって伝えるのかを扱うもので、一般にメディアと呼ぶが、つまりは話しことばとか新聞の活字、それにT・V映画、またその仲間だが、身振りなどの回路（チャンネル）をさすもので、まさにメッセージののりものとかメッセージを運ぶものと解せよう、従ってこの要素の分析を media analysis（媒体分析）、第三のそれは「誰に対して」伝えるのかという要素であるが、これは受け手とかきき手と呼ぶもので、この受け手の要素分析を audience analysis という。次いで伝えられた内容が受け手に与える影響もしくは効果をさすもので、この「どんな効果をともなう」いるのかを分析するのが effect analysis である。最後に、「何について語る（伝える）」かであるが、これは伝達される内容に関するもので、こ

の要素研究を content analysis（内容分析）として五つの領域に区分し、各々を分析して忠実度（high fidelity）を高める各エレメントの研究がなされている。

若干用語の説明をかねて各々のエレメントを述べると、まず情報の源泉である送り手（communication）の場合、頭に浮んだ意図なりを外部（頭の外に出す）に表出することをコード（記号化）と呼んでいる。そこで頭の中のアイデアをどのようにしてコード化させるかは、トランスミッターに相当する機械が必要で、ヒーマン・コミニケーションの場合は物理的な形式として音声、発声、あるいは文字にあらためて、つまりサイン（sign）の形に変える機械が手であり喉である。次いでエンコードだが、これは送り手の意図なり目的なりをトランスミッターにかけて記号化して、メッセージとするもの、さらにこのメッセージはチャンネル（運び、電波、配達—持って運べるもの）によって運びこまれ、受け手の解読機にかけられて意図なり目的にかえられことになる。

そこでわれわれは、この送り手から受け

手に伝えられる意図なり目的が、忠実に相手方に送りこまれ、解読され、意味が理解されることを期待するわけだが、まさにコミニケーション過程における高忠実度 hi-fi（high fidelity）の問題やノイズの問題をさらにはそれらを障碍するものを次ぎに扱わねばなるまい。

そこでまず考えられるものは、(一)送り手の情報の源泉にある。つまり伝えようとする自分の意図なり目的が明確であること、意図する効果の予見など、(二)次にこれを十分に意図するところを相手方に伝えることであるが、ヒーマンコミュニケーションの場合はただ送り手の意図・目的をそのままことばに表出することではなく、むしろ送り手の意図がそのまま受け取られることの方が高い忠実度が得られることになる。つまりエンコーダー（メッセージ）が完全に伝えられる必要で、そのためのスキル（技術的熟練）として、間のとり方、ゼスチャー、それにイントネーションなどなど、あるいは又送り手の用いたことばが相手方が理解しているか否か、あるいは又自由に駆使できるかにもよる。このためにも

是非コミュニケーションが可能であるためには、エンコーダーするスキルが欠くことのできない必要条件となってくる。(3) 次ぎに送り手の態度、さらには先有傾向 (pre-disposition) を問題、すなわち、あるものへの接近、遠離する傾向を態度と呼ぶが、これがコミュニケーションの効果に大いに影響を与えることは自明の理であるが、むしろこれはセルフ・エバリュションであつて、同時にまたサブジエイト・マターに対する送り手の態度にも左右することが次第に明らかになってきた。即ちコミュニケーションの出来・不出来はまさにこの対象物に対するコミュニケーションの効果と言つても過言ではない。(4) 受け手の態度、(5) サブジエクト・マターに対する送り手の知識、(6) 相手に対する知識、これは、送り手が受け手にその効果を予見することであり、それには相手についての知識をもたねばなるまい、これを「相手のイメージをもつ」と言うが、この際、相手方をイメージするといふのは、正確な知識ではなく、誰にでもそれと分る程度の知識である故に、相手をイメージする場合にはそのステレオ・タイ

プを使うことになる。つまりコミュニケーションを効果的にするためには受け手がどんなものにどう反応するか……といった知覚 (perception) を知らねばなるまい。この注意や反応を支配する心理学的知識が効果を左右するものと理解する。

- (1) マス・コミュニケーション読本、第一章序説、東京社会科学研究所編、東洋経済、読本シリーズ 19。

五つのエレメント(要素)

- (2) 1) Source(送り手) 2) transmitter(送信機) 3) Signal(シグナル) 4) receiver(受信機) 5) destination(受け手、目的地)
- (3) 1) Source→code, 2) transmitter→encode, 3) Signal→channel 4) receiver→decoder 5) destination communication situation

五、認識それは誤まるものなり

まず、ここでわれわれが考えておかねばならないことは、あえてデカルトを引き合いに出すまでもないことだが、われわれが事物やお互いの人間を認知しようとする場合、認知のエラーを余儀なくされている何ものかが存することを忘れてはなるまい。

つまりわれわれは得てして認識のあやまりをしているということだ。彼は自戒して言う「われわれが事物を認識しようとするとき感覚はわれわれを欺く……」と続けて「自分が真なるものとして受け入れてきたものは、どれもすべて感覚から受けとるか、感覚を介して受けとるか私はしたのであつた。しかし感覚はときどき欺くということを私は思い知らされたことがある。」(省察 Meditations AT. II-18)……と感覚のあやむきを指摘している。

日頃、筆者も考えているところだが、一般に認識においては次に述べるような傾向を持つてゐるのではなからうかとおもう。あえて他者の認識のみについてふれるが、事物のありのままの姿を割り引きなしには見ようとはしない、なかならず人の認識においてはなおのこと、何程かそこには自我水準とも相俟つて自分と同等もしくは、やや低く目にみようとすると傾向が常道のようにも思える。よしんば客観的に自分より優ぐれていたとしても、彼の主観においてはそれを僅かの差として認めず、それに優位すべき代償として何らかの他の利点を探

しそれに備えるものである。

いずれにしても、こうした一般的傾向はただに視覚の領域にのみ存するのではなく広く聴覚や触覚にも存在しているとおもえるし、これがミス・コミニケーションするゆへがすこののできない要因と考えていいのではなからうか。

次いで、それを日本語につちかわれたわれわれ日本人の、この文化のもつ特性つまり曖昧さ、からくる要因をみかえりみておこう。原田たり子も言うように、概して日本人の会話においてはあまりハッキリものを言わない、つまり適当にぼかして表出する部分が少くないというのだ、例えばそのイデオームだけでも、ざあっと、そらす、ぼかす、ほのめかす、におわす、まぎらわせるなどなど数え上げることができる程である。同時にものをハッキリ言わぬとは曖昧なことばでぼかすばかりか、同時に身振りや表情にまで、さらには発音、声の抑揚、大きさ、間のおき方などに僅かだが変化をみせるのだという。そうかと言えどときには黙りこけて沈黙しているのも、このものをハッキリ言わぬ範疇として位置づけられ

るものだとも言う。

これなどは先に述べた自我水準とも関連をもつのであろうが、もう少し彼女の説明を参考にしてみよう。つまりこれは対人関係のなかで処世術のようなもので、一つには自分を強く意識せざるを得ないとき、このあいまいさを表出して自分を防衛するのだと言う、即ちこれはみな相手方から逃げようとする姿勢であって、相手に対する警戒心とわずらわしさを物語るものだ、次いで二つ目は、今度は逆に相手側を強く意識する場合で、逆に向う姿勢をとるというのだ、つまり相手の気をひいたり、困惑させたり、思いふりを感じたりするというのだ。最後の三つ目のあいまいの関係は、お互いを強く意識する場合で、この場合はむしろとけ合う姿勢をとるとして、相互の安心感や罣りの状況に逆らわない等々を挙げている。

この他、一、二、三の範疇には入らないが、コミニケーションの立場から興味のあるものを拾い上げてみると、人が判断のつきかねるとき、事物をよく知らないとき、得てしてわれわれは曖昧な表出をすること

があるというのだ。また美に興味ある指摘は、この曖昧をむしろ積極的にとり入りかつまた評価してこれを意味づけようとしている点にある。即ち日本人がこれを表出する場合、むしろそこには言うに言われぬ美しさをかもち出すというのだ、つまり白黒ではない。この灰色の部分に目を定め、心ひかれることを指摘したのだが、日常の会話のときにもこれに似た、表出つまり、いい残しとか書きのこしといった部分の欠落を意図的に行為して心にくいほど余地を残し、あたたかみを心くばるというのだ。

なる程、われわれ日本人の場合、理屈はいのはきらいで、とことん理屈でおさえるということはしない、むしろ彼らを屁理屈家と称していみきうことさである。とくに人間関係ではそれが著しく、人々はみな水くさい、角がたつ、などと言われぬよう適当なぼかした部分を共有し、むしろこの余地により人を傷つけずにあたたくつつんだり、強いではそれが自分をも他からいためつけられるのを恐れているとか、ときには心の配り様が異常だとも思える程気をつけていることがよくある。断る場合

でもそうだ。それを恐れるあまりハッキリ言わず婉曲的な表出法と身振とで、ときには「まあその……」などの事態語の挿入を駆使してことわろうとするのだ。

その他、彼女の重要な指摘は、この曖昧のもつ二つの役割を、ある面では適当なばかりを共有しながら、人間関係のギスギスを調整する潤滑油の働きをして、人や人間関係に快びや安定を与えたりするのに、他面では不安や緊張、それに不快、さらには神経疲労はじめ度を越すと無気力、気關心などの思わぬ産物まで刈りとらねばならないことを指摘した点である。

いずれにしてもミスコミュニケーションを扱う場合、こうした文化的背景をもふまえながら、具体的なコミュニケーションプロセスにおける不十分な表現故におこる理解の因子に迫っていく必要があらうかともう。

われわれが外界のものを認識しようとするとき、つまり客観的に存在する現実の世界のありかたを、人間はその個人の視覚(目)、聴覚(耳)、触覚、その他の感覚器官をとおして捉えるのである。まさしく認識

は現実世界の映像もしくは模写である。それらはみな個人的な主観の世界の映像となる。つまり個々人の頭のなかにしか存在しないものと言うことができよう。ところが

「人の認識は社会的である」と言われるのは、人間はこれを個人の頭の中のみ留めておくことはできず、むしろ社会生活の特徴とも言える「交通関係」⁽¹⁾即ち「活動の相互交換」(マルクス『賃金労働と資本』)、つまり「もろもろの個人は、たしかに肉体的にも、精神的にも相互につくり合う」こと

によって生活の生産を営むとする。ここに目を転ずるならば、精神的(生活)生産もまた、他の人間の認識を自己の頭の中に受けとめたり自己のそれを他の人間に伝えたりして相互につくり合つてなりたつわけである。ただ単に相互に交通関係を通じて伝え合うだけではなく認識に広さ、深さをつけ加えて、さらに成長、発達するのは「自己の認識が他人的になること」によって自己として成長していく⁽²⁾といった社会的なる意味をもつからだと言つていい。

ところが、多少問題にしておかねばならないことがあるが、それは個々の人間の頭

の中に存在する認識がことばを介して、相互に交通関係をもつのだが、認識それ自体しかもそれを伝達する際誤りなくそれを完結することは、有機体、つまりここををもつ人間にとつてはしごく困難な業と言わねばなるまい。人間をふくめたあらゆる生物が、その社会生活に必要な伝達にとつて、

いかなる瞬間においても、外から与えられたもの(情報)と、それを伝達する場合とは同じものであつても同一のものである。それはとりもなおさず人間の存在そのものが有機体としての矛盾(非敵対的矛盾)であり、肉体的なもののばかりか精神的なそれにおいても同じことが言えよう。つまり精神の生産成長、即ち認識の発展においてもみられるところで、先に述べたように認識の基礎は現実の世界を模写するにあると言つたが、これとて、本質的な非敵対的矛盾を形づくっていることを忘れてはなるまい、つまり現実の世界とて、時・空間的に多様でしかも無限であるにもかかわらず、その一部を頭のなかにとり入れるにしてもそれは限られたものでしかない。ここに人間のもつ認識

は、その能力は無限であつても制限をもたざるところにこのことばの認識も問題にされねばならない。

そこで、認識が本質的の矛盾をはらみながらも具体的に個人の認識の構造として役割を果たす以上、その幾つかを書きとめておくが、その一つは、他から与えられた（伝えられた）という意味においては認識は受動的だということにならう。ところが、人の場合必ずしも直接自分が見ることができないにせよ、他から伝えられた内容をきいてそれを認識するものである。ここに認識の受動的でしかも限りあるものだが、同時に能動的に現実に向つて問いかけ、その限界を超えようとするのだということに注目しておく必要があろうかとおもう。しかもこのこと自体また矛盾なのである。したがつてまた、ここに「予想」と呼ばれる認識の一形態をなりたたせることになる。つまり認識するものの側から、現実の世界のあり方に接近しようとするもので、この活動は一致をめざすものでありながら、現実には未だ見たことのないものを存在するものとして、イメージを頭のなかにつくり出す

のだ、ここに本質と現象との矛盾、不一致なる現象が生まれてくる（ピーサレフ「未熟な思想の失敗」参照）

彼はこの際、現実と夢想について述べているのだが、彼の主張はまさにこの夢想の積極的な役割について論じ、この夢想に対する二つの性格をとり上げて、つまり現実に近いこうとする先走りとそれから遠ざかるうとする幻想との矛盾を説いた。

二つ目は、認識の本質的な矛盾から誤謬が生まれてくるということである。つまり人間の頭脳というのはテープレコードのように、外から与えられた情報としてそのまま忠実に受けとめるものではない、あるものは受け入れるしあるものはこれを拒みもする、時には正しいにもかかわらずそれを拒否したりもする。こうして誤謬を犯さぬ人間などというのは現実には存在しない。それだけ認識の矛盾が真理と誤謬との調整、かつまた統一を生み出すのである。

なお第三の問題は、個々人の認識の内部に意志に対立する意志として、三浦つとむのことばを借りるならば「いわばフィードバック的な構造を持つ矛盾をつくり出す」

ことになる。続けて「この対立する意志は、ネガティヴ・フィードバックとして意志の成立を抑えたり、あるいはポジティブ・フィードバックとして意志の成立を促したり」することを述べているが、これとて一つの矛盾と言わざるを得ない。いわんや、社会秩序の一翼を担う掟や道徳、規範、法律などさまざまなソーシャル・ノルムが存在するのだが「意志のもつ矛盾としての規範の成立」として、人間の社会生活の本質的なあり方への認識の規定を説明している。

要するに人間の存在それ自体、たとへばヘラクレイトスの引用をまつまでもないことだが、「自分自身と分裂しながら自分と一致する」いわゆる「一分為二」の形の矛盾として、このことばの交通関係を考えるならば、自己と自己以外の自己の存在というこの矛盾のなかで、自己の観念的な自己を発見することになる。つまり人にまず、他の人間という鏡に自分自身を映してみることに、直接経験できないものを（現実的に他人の観念）自己に置きかえることによって自身のあり方を定位するのであ

る。

このように「他人という鏡」は古くよりわが国でも人から人へと語り伝えられてきたが「人の亀鑑^{かみかん}」などときにはことわざとして「人のふりみてわがふりなおせ」などなど他人の観念の自己への置きかえこそ、ことば（言語）をはじめとするさまざまな表現である。

さらにはまた、これを受けとる側の人間においても、現実のままでは正しく受けとることができない。ここにもまた矛盾が生ずることになった。たとえば、バングラデッシュの記録写真でもそれをフィルムにおさめたときの作者の現実的な自己の位置での認識を表現しているけれども、これをテレビやグラビアなどのメディアにのって報道されたものをみているといつか作者の位置に自分も立ちそれをみようとするのである。ここに人間の自己分裂が強制され、作者の精神のあり方に、できるだけ忠実な複製に近づくことを要求するのである。こうして他の人間の認識を受けとる場合に、いつでも観念的な自己の分裂なくして、相互の交通関係はなり立ち得ないということ

になるのだが、これとて限界のあることは注目しなければならない。つまりこの人間のもつ認識にはおのずから限界があり、この限界故に真理からあやまりを生ずるということだ。

たとえば雪におうわれた原野でウサギを発見しても、白い雪の色にその姿を見うしなつてしまふであらう。これなど確かにわれわれの視野の中には存在しているのに、その姿を視覚でとらえられないことによるものである。この他、あまりに小さなものあまりに早く目の前から立ち去つてしまつたもの、これもみな視覚にはたしかな映像をうつし得ないのである。そこでこれらの限界をのりこえるために先程述べた鏡（道具）の如きは媒介的にみることが可能となる。たとえば、前分を見ながら同時に後方もみるという矛盾もバックミラーによる解決が可能になりうるのだ、ところが雪のなかのウサギでも、それ自体感性的なものであるから、何らかの方法を用いば目で視覚にとらえることができよう。だが殊の他われわれ人間のこのころの場合、それに代わる。たとえば脳波による精神活動の記録も

可能ではあるが、すべてではあり得ない、これとて誤まりのあるものと考えねばならない、つまり「どんな鏡でもそれなりの限界がある」ということだ。

ここに、真理と誤謬、認識と誤認、理解と誤解があるのだが、ディレーゲンに代表されるように、これらの本質的矛盾から、真理と誤謬との対立をいかに統一させるのかこれを論じているものと考えられる。これこそ弁証法なのである。誤謬は現実の世界の多様性から生ずる限界と、これに対する認識の限界とのからみ合いということになると三浦つとむが説くところ、ここに現実の世界と正しい認識に至るには、分解によつてえられた認識を再び観念的に結合してゆくことの必要であらう。この個々の認識の限界を他の認識の結合により超えるところのもの、これが人間のことばによる対話ということにこの役割を求めらば、ことばのもつ社会性はまことに重要な概念と言つていい。

(1) ソシュールの「言語」（ラング）のように頭の中にある規範をさすのではなく、表現をさすのである。

(2) 三浦つとむ「認識と言語の理論」勁草書房十二頁。

(3) 三浦つとむ「同掲書」四頁。

六、コミュニケーションの流れをスムーズにするもの、阻害するもの

よく、「人はもつともよく他人の影響を

うける」というが、こと対話においては、他人の影響力をなおざりにすることはできない。先にみたように、人の意志疎通が成り立つには伝え手である「話者」とその受け手である「きき手」の二者からなる人間関係の総和であることは自明の理であらう。すなわち、「話し手」は彼自身が事実体験した事柄や心中におもいおこされた様々なニーズ（マインド・ファクト）を他に伝え、他とこれとともに（共有）したいという願望をもつものである。なおのこと、彼の心中奥深くに生じた複雑な感情にいたるまでもこれを言い表わし、これを合ちあうとするものである。したがってこれらの複雑な心の動きを送り手は相手に十分に意図が伝わるためには、送り手の真摯な態度は

もち論のこと、さし当り、意味の十分通ずるような適切なことばを選んでこれを伝える。同時に「きき手」はこの送り手の音声によって発せられたことば（シンボル）を耳で適格にとらえ、次いで、その送り手の意図を受けとるために、できるだけ忠実にシンボルから意味や内容を抽出しようとする。コミュニケーションの効果を下下せないためにも、この間の過程にあやまりがあつてはならない。ゆえに双方に共通な言語、共通の意味のシンボルの共有ということが欠かせない条件となってくる。

だが得てして受け手には人々のことばを忠実に聞くことにも、また、忠実にその意味を解するにもある困難さをもつものである。むしろ人間であるがゆえに犯かすあやまりを否定できない限界がこれには伴うのだ。前者は、ききもらし、きき違い、など、後者は、意味の取り違えなど、みな意志疎通の障害（誤解）をつくり出す要因になつてゐる。しかも現実にはこれらの限界を一応肯定し、これを越えて会話が成り立っていることを銘記しておくべきことであろう。

一般にヒートマン・コミュニケーションの場合、対話は、これを成立させるための人間的条件、つまり二者（送り手、受け手）の存在、それに双方に共通の意味シンボルを共有することなどの必須諸条件など度々述べてきたが、対話は送り手の内容が伝達されたことにより欲求が消滅してしまうのではない、むしろそこに一つの共有する意味の人間的、心理的空間をつくり上げることで、ここにヒートマン・コミュニケーションのものの社会的役割の重要性を見出すところにその二次的機能があると言つても少しも過言ではない。

普通、「話し手」が「きき手」に、また「きき手」が「話し手」に役割を交替しながら話しを進めるわけだが、より会話がスムーズにとり行なわれていくところには、相互の心理的特徴としてある共通のなにかがみられるとおもふ。即ち一言でこれを言い表わそうとするならば、相互に存在する「われわれ」という意識ではなからうか、そこには進んで自分が相手方に、相手が自分ひき込まれようとする合一する意識が、ときには共鳴し合つたり、まっただき同

意すらあるのはまぎれもなくこの良き証しであつて、唯々伝達に終止することなく、これを越えて相手の意見に一致しようとする人間の特性をも見逃してはなるまい。さらには、この社会的機能は「今、ここで」を越えて、後代にまでつまり世代をこえてこれを伝え遺すといった機能とも兼ね備えていることを考えるならば、まさしくその文化的機能をも、これまた見落してはならないヒューマン・コミュニケーションのもつ社会的側面ということにならう。と同時にこれはコミュニケーションの逆機能とも言える現象さえもちうることに心せねばなるまい。まさにコミュニケーションの成功・不成功は送り手と受け手の物理的・心理的・社会的函数の総和であるといったのは実はここにあると考えたからである。つまり送り手の内容の表現に真実性を喪失したり、表現に誤りやまが混入することにより、他方受け手は正しい理解どころか、逆に誤解を生む結果になりかねない、こうした困難性をつねにもっており、この困難性は送り手にあつては表現に関わる問題、受け手にとっては理解に関わる問題として捉

えておく必要があろう。

そこで、その一助として米国のグラハム社（電気通信機研究所）能率向上に供した情報理論（モデル）を参考に（図参照）われわれは先に挙げたH・D・ラスウェルの「要素・五つのW」さらに、表現主体と理解主体とその下部構造とにわけ各々をコミュニケーションの流れをスムーズにするものをここで捉え、パターン化しておこうとおもう。

彼は、表現主体をさらに三つの要素（下部構造）に分けそれぞれを

要素(一) だれが (Who)、コミュニケーションの送り手、コミュニケーションター

要素(二) どんな回路によつて (in Which channel)、コミュニケーションを行なうメディア

要素(三) 何について語るか (says What) コミュニケーションによつて伝達される内容

さらに、他方理解主体をも二つの下部構造、つまり

情報のモデル

図2

information model	
code	source
encode	transmitter
channel	signal
decoder	receiver
communication situation	destination

要素(四) 誰に対して (to Whom)、コミュニケーションの受け手

要素(五) どんな効果をともなつて (with What effect)、コミュニケーションが受け手に与えた影響または効果

に分解して説明している。したがって、また、われわれもこれを大いに参考にしながら、(一) Who (communicator) (二) in Which channel (media) (三) says What (content) (四) to Whom (audience) (五)

with What effect (effect) の解析

即ち

- (1) Who (communicator) ……control analysis (「統制分析」)
- (2) in Which channel (media) ……media analysis (「媒体分析」)
- (3) says What (content) ……content analysis (「内容分析」)
- (4) to Whom (audience) ……audience analysis (「受け手分析」)
- (5) with What effect (effect) ……effect analysis (「効果分析」)

などからなる要素分析を行なうものとす。ただし、今回はわれわれはつとめてメディア分析には、はなしことばに限定しており、他のかきことばや身ぶりことばなどについてはふれないことにするのでこれをしておきたい。

そこでまず「表現主体」の要素、すなわち、統制、媒体、内容からはじめるが、一言でこの過程は、送り手のエンコーディング・プロセス（記号生産の過程）といっている、つまり送り手という人間存在はもとより、彼の胸中に生じたニーズ（マインド・

ファクト）しかもこの存在は後の媒体や内容といったものに大きく左右するものと考えられる。さしずめ送り手の統制が重要な要素となっていることが分かるであろう。まずそれにはものを正しくみるということと、それを正しく伝えるという人間性にまつわる本質が問われなければならないことはもち論だが、その上になおそのニーズは自分だけに止めることをせず、何らかの機会に何らかの方法でこれを他に伝えたい。あるいはまたある送り手の内意を他とともにしたい。つまり共有したいという願望へとすすみ、したがって、それに耐える丈けの意図や情報に内容がなければならぬ、伝えたい内容、聞いてもらいたい訴え、伝えねばならない使命、分ってもらいたいこと、すなわち理解や説得がコミュニケーションには欠かせないものである。無論内容が明確になると次いで内容のまとめ、適当なことばの選択、それに一定の文法に則った配列へと頭の中で準備されるが、これを進めるためのニーズや動機の必要なことはことわるまでもないことだが、その他情報の信憑性やそれを伝える者（送り手）

の真摯な態度などに負うところが大きい。

こうして頭の中に生じたニーズは具体的なことばという意味のシンボルの選択によって事実や思想それに感情などが組み立てられ、相手に伝えられる媒体という段階へとすゝむのだが、この際とくに話しあいの場合重要なかくくりは、まず適切なシンボルを選び出すことにある。ところがかくこの部分は個人のもつ能力により左右されるところであつて、最も適切なシンボルから、さらに深みのある内容やニュアンスをも表現しうる能力を必要とするものであるからこそ、もち論これは送り手の意図を正しく伝える（伝達）だけではなく、正しい意味を相手に伝える（理解）という過程でもある故に、受け手の理解度を左右する送り手側の最大のスキルとして要求されるところでもある。したがってまた、その能力こそ人格さらにはそれらを支える知能に関わるもの、つまり教養、文化等との知識を必要とすることは欠かせない条件となってくる。しかもこれらにうらうちされ味つけられてことばが準備され、いよいよ送り手の

内容が受け手に音声として表出されるわけだが、ことばを分節された音節をもって発声され、相手の鼓膜に音波として空間を振動して伝わり、大脳がこれを感じて、シンボルから意味へと翻訳するという記号解読の過程に入っていくのだが、さし当り問題になるのは、表現主体の「送り手」と、理解主体の「受け手」とからなる、トータルな人間関係の函数について指摘しておいたが、再度説明しておく必要がある。そこで、まずこの両者の間に存在する物理的条件、つまり二者の間の距離とか音声の大きさなどは一定のコミュニケーション可能な条件としてコンスタントと仮定しながら、その以外に人間関係の函数に直接関わりをもつ因子としては、双方の間に存する心理的・社会的かまゑ (readiness)、ヒーマン・コミュニケーションの領域ではこれを「自我水準」と称しているが、この存在を無視するわけにはゆかない。

つまり、コミュニケーションによる理解を度外視しては人間はお互いに仲間というよりはむしろ、逆に異質、関係のない者とさえ認識をすることだ。これが人間の自然

状態なのかは分らぬが、人間特有の心理的防衛といつていい自己保存の法則がこれに関係してくる。先にみた、H・ホールの指摘する第二社会圏にしてもそうだが、本人から三メートル以内の円の周位に存在するものは、必ずしも本人に向つて立たなくとも、ある種の緊張を余儀なくされてしまうというものだし、何らかの意味で「私」に関わりをもつ他人としてこれを意識することを使うのだ。この自我水準にまつるメカニズムの証しではなからうか？、したがって、これを極く一般にみられるものとしては初対面の場合で、例えば面接の場合、わたしに面接するものが誰なのか、気になり必要以上の恐怖を感じたり、異常な緊張からあがつてしまうことすらある。そこでわれわれは相手を知らうとする心がはたらくのだ。すなわち、初対面だから相手に対する情報は皆無に等しいし、しかも何らかの理由で話し合いを必要としたり、あるいは又、伝達せねばならない場合、しかも相手が自分より目上であつたり、身分の高いものであつたりするとそれだけで自分を見失なつてしまふほど緊張をするものであ

る。そこでこの不安定な自己をとりもどすためにも、何かを手がかりとして相手を知りそれに備えようとする心的機制が働く、例えば男性が女性かはすぐ見わけがつく、ところが年令、つまりいくつ位かが判明しにくい、とくにこの相手の年令は実に気になるものの一つである。それに服飾とか着こなし、色あい、スタイルなどから凡そどんな人なのか、さらには、顔つき、体型、しぐさ、ときには彼の手にかけている説物などから、できうる限りをつくして情報を集めて彼のイメージづくりをする。こうしてでき上つたこの「かりの彼」に対して話しの糸口をみいだそうとするのだが、きわめて不安定ながらこの「かりの彼」と實際とを修正しながら話しは進展してゆく、だが終止この「かりの彼」との間の差がより明確になるまではそうした手がかりを止めようとはしないのが常のようだ。

得手してわれわれが相手に対する情報が足らず、したがつてさぐりと称する段階では、いきなり話しの格心よりもやや一般的な会話、たとえば天候のことども(暑さや寒さ)にかこつけて「今日は実に暑いです

なあ……、そうしてはしばらく打水をかけておいては相手の反応なり出かたなりを見る。あるいは同じ席に居合せて同時に目撃したものから、これをとっかかりとして話題をひろい話しの場を開こうとするものである。その他、こどものこと、新聞のニュース、服飾、趣味、映画、スポーツ、車などいろいろあろうが、それらはみなやや共通する話題から相手方を知ろうとするよび水の役割を担おうとするものであろう。しかもそれは、相手と自分との間に話題の共通さを求めることにより、間柄である、つまり仲間であることの打心や確認の準備段階と言つていい、まさしく話しあいのおーミングアップとも言える。

対話における心理的関係は原則として対等の関係を必要とするが、送り手と受け手の間に生じた心理的、社会的位置関係によつては、双方に優劣の関係が発生する場合がある。例えば先に挙げたように、話しの相手を年下のようにかん違いしていたところ實際話しが進展するうちに自分より目上で、しかも社会的にも身分が高いことが判明したりすると、急にこれまでの態度を改

めたり、時にはエクスキューズを謝びたりしなければならぬことさえある。また逆の場合には、急に態度が横柄になったり、ことば使いが改まつたりして、ガラリと態度が変わるものである。その他、この話しが導入の段階では、たまたま趣味や興味が一致していたり、ときには同県人だつたり、ある体験をともにわかった者同志だつたり、戦争で同じ方面に進駐していたとか、境遇が同じだつたりして、急に相手方と自分をつつんでいた異質が取り去られて「われわれ」としてのある安らぎさえ感じられるようになり、急に親しさを増し、話しはトントンと進むことになる。

逆に、身体のごくかに障害がある場合はもち論、すぐとかきらいとかいう一片の感情に支配されて、人を偏よりみることによつて起こる対話障害も見逃がしてはならない問題とならう。改めて、コミュニケーションが可能となる、二者のトータルな人間関係、しかもこの場における函数関係が結果することからなる自発的交流の場 (speech community) がいかに重要かが分かるであらう。

ところで、話しを戻して、ヒーマン・コミュニケーションの要素とその分析になるが、他方、理解主体としての送り手のメッセージを誰が受けとるのか、この送り手に対する受け手、これの要素分析に移ることにしよう。今われわれは双方の間に存在する心理的、社会的かまえ、つまり自我水準により、いかに会話のスムーズさが疎外されているかを理解しえたと思うが、その外に受け手の送り手に対する態度、これについて若干述べねばなるまい。確かに送り手からはあるメッセージが送られてきたにせよ、肝心の受け手がこれをきく態度を失なっていたのでは、送り手の努力は償われな

いことになる。一般に人々は受け手にとっては、送り手に対する批判的態度であつたり、防衛的なかまゑを持つものである。したがつてまた、この態度に変容がない限り、正しい認識や正しく相手方の声に耳を傾けるということができない。そこで、送り手、受け手、双方のスキルを高めること、つまり情報理論ではこれを hi-fi (high fidelity) と称するが、忠感度を高める技術的熟練を

必要とする。とくに、送り手にあつては、自分の意図なり目的なりをハッキリもつこと、意図する効果の予見をもつこと、相手に対する知識、受け手の反応や知覚、受け手の社会的・文化的地位などで、先に述べたところだが、他方受け手は送り手の態度やサブジェクト・マター (subject matters) に対する送り手の知識の有無はもち論のこと、送り手に対する知識、それに受け手自身もまたサブジェクト・マターに関する知識の度合などが複雑に錯綜し合うのであるが、若干整理してみると、(一)とくに双方にゆきかうことばがもつとも重要な役割を果していることが容易に分るかとおもう。次いで、(二)双方の態度に左右されるが、とくに相手に対する predisposition (先有傾向) がそのきめ手になることをこのころにとめたい。(三)サブジェクト・マター、自分が相手に伝えるべき内容やもの(物体)があやふやであつたり、また十分な理解にとばしい場合など、十分な hi-fi を期待できない。最後に、(四)相手に対する知識、まずこれはコミュニケーションの効果をおげること、すなわちその効果を予見するた

めにも、相手に関する知識やイメージをもつことが必要条件となることであるし、同時にその知識とは、相手の注意、反応をみ、それを支配する心理的要素とも関連して総合的に影響しているところであつて、先に述べた「自我水準」なる概念を用いて説明した、個人の属しているソーシャル・ステイタス、これがコミュニケーション効果、即ち E・R を高め、コミュニケーションを成功させるものとなつてゐる。

以上、コミュニケーションの流れ、即ちスムーズさを求めて各々の要素から定式化しておいたが、その逆作用こそそれを阻止するもの、つまり本論のコミュニケーション障害である。

七、もう一つの阻害

先の項で、われわれは一応コミュニケーションの流れについて概観してみた。

次いでわれわれが扱わねばならない事柄は序の部分でも述べたところの、たしかに送り手の意図する内容が受け手に忠実に伝達され、しかもその意味も十分に理解されたにもかかわらず、それでいて「ただこと

ばだけですか」……という受け手の反応を受け取ったときのそれである。

これは必ずしも臨床というクリニクの問題だけに止まらず、ごく一般に体験することがある。たとえば家庭という近親者の集団、つまり婚姻という制約をとりかわした夫婦の間にも、また、この間柄から血縁の關係を生じた親子のそれですら、さらには世代をかさねたもの同志の間にも、ときとして唯意味の通じあわないこと丈けなく、ことばの内容も意味も理解されたのに「あなた(親、子、孫)の言いたいことは分かるんだがなあ……」といった形式がここでは問題になる。

先程のような形式が流れを阻害する問題ならば、その発生病理はコミュニケーションの目的可能の実現として、送り手がいかなる効果を期待しそれを伝達し、受け手がいかなる効果を得たかに関わるもので、メッセージが伝達される場合に派生する consummatory effect、さらには、メッセージに対する反応が他の反応を生むところの充足(道具)としての instrument effect、つまりここでは主として、コミュニ

ニケーションの機能を送り手の心的内容の伝達よりも、むしろ表出によるもの、あるいはまた表出された結果、相手と内容を共有したという満足感によって、送り手のニーズがあるいは内的緊張を解消させようとする機能であつて、その場合、送り手の伝達したコミュニケーションは consummatory communication としての目的がかなえられることになり、これを自己完結的コミュニケーションという。他方、内容の正確な伝達より、むしろ相手との心的内容を完全に共有して、相手に共感をおこさせること、これを目的とする伝達ならば、この意味で道具としてのコミュニケーション (instrumental communication) となる

のだが、この際の阻害現象即、病理は、後者のプロセスル関連するものであつて、相手との間に伝達されたことばを媒体として内容や意味の合一にあらわずして、むしろ人間的一合へと邂逅する阻害のそれを言えよう。

したがつて、この場合、最早、それ以上のことばとか意味の伝達は必要とせず、まわりぐとくなるが、意味の意味を完全に共

有することである、具体的には病めるクライアント故、そのクライアントのもつ苦惱 (predicament) に片足入れて聴くというカウンセリング的態度と言わねばなるまい。もはやそれ以上ことばを必要としない態度、これがこのクライアントに対する処方箋なのである。

ただ、この際なぜクライアントをして、「ただことばだけですか」と言わしめた、こころのからくりについて述べねばならないが、許されるならば別の機会に論述したいテーマである。この他、ことばの魔術 (word magic)、ことばのもつ物理的現象としての音声を扱かうゲシタルト (Gesalt)、ソニエールのラングとハロール (pistrument)、それに、ことばのもつ機能面をさらに、記憶、判断、理解、想像、創造性、伝達、行為 (実践) を体系化して、社会福祉 (学) の優れた原理「社会のため、人々のために生きている人間」としての定位確立のため言語学をも含めて、すべて次の機会にゆずりたい。

福田

園果を種植するが故に、

林の樹の蔭清涼なり。

橋船を以て済度し、

福德の舎を造作し。

井を穿ちて渴乏に供し、

客舎を行旅に給う。

此の如きの功德、

日夜常に増長し、

法の如く戒を具足し、

斯に縁りて生天を得。

(雜阿含經第三十六)